

現代史_(下)

小田実

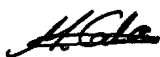


河出・書き下ろし長篇小説叢書 7

書き下ろし長篇小説叢書 7

著者略歴 1932年大阪に生れる。57年東京大学文学部を卒業。
58年フルブライト留学生としてハーバード大学に留学。小説
『明後日の手記』『わが人生の時』『アメリカ』『泥の世界』(以
上河出書房)、『大地と星輝く天の子』(講談社)；評論『日本
を考える』(河出書房)、『壁を破る』(中央公論社)、『戦後を
拓く思想』『平和をつくる原理』(以上講談社)、『義務としての
旅』(岩波書店)、『日本の知識人』『人間・ある個人的考察』
(以上筑摩書房)；旅行記『何でも見てやろう』(河出書房)他。

現代史(下)

発行所	東京都千代田区 神田小川町三の六		昭和四十三年十二月二十日 昭和四十三年十二月二十五日	初版印刷 初版発行	定価六九〇円
株式会社	河出書房新社	東京都千代田区神田小川町三の六 発行者 中 島 隆 之 印刷者 和 田 彰 三	著者 小 田 実		
振替口座 (東京) 一〇八〇二番					

菱 幀 池 田 龍 雄

現代史

(下)

書き下ろし長篇小説叢書

7

第一章

1

ジョンの東京見物——いや、日本見物についての聖子の予定はきまっていた。午後二時に彼のホテルのロビーで会って（それまでに彼はホテルに帰って来ていて、シャワーをひと浴びしているはずだった。ジョンはそんなふうに昨夜電話で言った）、すぐ上野の博物館へ駆けつけて、それから銀座へいったん廻って、そのあと、タクシーでオリンピック競技場のあたりをひと廻りしてからもう一度浅草へ出て、雷門わきの「松吉」でスキヤキを食べる。ロビーで落ち合ったとき、聖子がそんなふうに説明すると、ジョンは肩をすくめて、きみにこんなすばらしい観光旅行を「オーガナイズ」する力があるとは知らなかったという意味のことを、いくぶん皮肉まじりの、いかにもハーバードのインテリらしい口調で言った。ジョンは変っていないかった。ただ一つの変化といえば（かなり肉づきが悪くなったことを除けば）、兵隊らしく髪を短かくしていることだけだった。しかし、彼のまわりに兵隊く

さき、あるいは戦場の匂いといったものを嗅ぎとることはほとんど不可能に見えた。かつての彼と寸分かわらぬ清潔な石鹸の匂いをする。シャワーを浴びたあとなのでことにそうなのだろう、髭もきれいに剃っていて、聖子のまえにいろのは、どう見ても若いアメリカの学生だった。聖子がそれを見ると、ジョンははにかんだように笑い、笑うとますます子供のような表情になって、聖子は一挙に六年前に連れ戻されたような気がした。眼は蒼く澄み、鼻は高く、顔の皮膚は白くて、両目のすぐ下の頬にソバカスがあるのも変りはなくて、それは可愛い。そこだけ見ていると、彼に見せてもらった家族アルバムにあったいたずら坊主時代の写真が自然に思い出されてくる。クレイトンにいたとき、彼のソバカスを見るたびに、聖子は自分が子供のときから彼を知っているような錯覚にとらわれたものだが、ホテルのロビーで会ったとたん聖子をとらえたのは、同じ錯覚だった。いたずら坊主時代から今日まで、ずっと知っていて、ずっと会って来たような。

ジョンは、聖子が変わった、すばらしくきれいになったと言った。すかさず聖子は抗議した。じゃあ、昔はきれいじゃなかったのね。そんなことはない、ぼくは、今、現在の「セーコ」をすばらしくきれいになったと言ったはずだ。そのことは言外に、きみが昔もきれいだったことを意味する。そうじゃないかね。そうじゃないわ。聖子は笑いながら抗議をつづける。いや、そうかも知れないけれど、私があなたに言っていたきたかったのは、昔も「セーコ」がすばらしくきれいだったということだった。そんなら言おう——ジョンは昔

の癖のまま、蒼い眼の玉をくるくるまわした——きみは昔も今も変らない、すなわち、すばらしくきれいだ。手おくれだわ。聖子は笑った。

ホテルからタクシーで、まず、上野へ行った。車のなかで、ジョンは自分の家族の動静を手みじかに要領よく話した。彼の家族は聖子も訪れたことのある芝生のきれいな白い壁の家に今も住んでいて、元氣。変りはなかった。聖子の寄宿先のリフトン家では、聖子と同年のナンシーには、もう子供が二人。それは知っているだろう？ 知っている。聖子はうなずいた。街は変わった？ 変りはしないよ、あんな田舎町。何年たったって変りはないな。「フエアレディ」という店はまだある？ あるよ——と答えてから、ジョンはじつと彼女を見た。どうして？ 聖子はあの店でネグリジェを買ったことはまだジョンにも告げたことがなかったのを思い出して、あかくなつた。「なんでもないのよ、ただ、ちょっと思ひ出したものだから」

ジョンは聖子の手をとっていた。それは自然なしぐさだった。そのままもし聖子がジョンにむかつて上体を傾けるなら、同じように自然な動作で彼の顔が聖子の顔におおいかぶさってくるだろう。ただ、その場合でも、聖子が想像していたように、戦場から立ち帰って来た兵士の絶望的なしぐさではないように彼女は思った。そうしてみたところで、もちろん、聖子の鼻、いや、皮膚が嗅ぎとるのは清潔な石鹸の匂いで、それは、かつて、クレイトンでよく嗅いだ親しみのある匂いだった。

「サイゴンはどこなところ？」

戦争のことを直接訊ねるのが何故かはばかられて、聖子は遠まわしに言った。

「アジアのバリだという人がいる。まあ、汚いバリだな。食物はたしかにうまい。セーコも来てみるんだな」

「だって、そこでは戦争やってるんでしょ」

「東京からだってバリからだって、いくらでも旅客機が飛んで来る。げんに、ぼくもエール・フランスの飛行機で日本に來たんだよ」

「ほんと?！」

聖子は眼をまるくした。それはポーズでもなんでもなく、真実おどろいたので自然にそうなったのだが、ジョンの蒼いひとみのなかにうつる彼女のそのしぐさは、自分の眼にもいくぶん芝居がかったものに見えた。

「飛行機のなかにはバリの匂いがするというわけね、戦場の匂いじゃなくて……」

ジョンはげんな顔をした。その顔を見て、聖子は、戦場の匂いというのはいったいどんなものなのか、はじめていぶかしんだ。ほんとうにどんな匂いなのだろう。たとえば、それが爆弾の匂いだとしたら、どんな匂いなのか。あるいは、爆弾に吹き飛ばされた死体の匂いだとしたら。義彦はその匂いを何度も嗅いだことがあると言った。彼によると、それは鮭の罐詰の匂いだ。鮭罐を開くと、ブウンと匂ってくるそれ。その話を義彦が唐突にやり始めたのは、ある夏の夕べ、あまりむし暑いのでみんな食欲がなく、野菜サラダだけで夕

食をすませてしまおうということになって、恵子がアメリカ土産の電気罐切り機で鮭罐を開いたときのこと、聖子が食欲をそそるいい匂いだと思ったとたんに、何を思ったのか、

彼はそのときまるで遠い物音に耳をすませるような顔をして「この匂い、おれは駄目なんだ」と話し始めた。なんでも、彼は焼跡で死体かたづけの作業をしたことがあるとか言った。

「だって、義彦さん、そのとき、中学生だったんでしょ？」

「動員というのがあったんだよ、学徒動員」義彦は笑った。

その笑顔はもうさっきの遠い物音に耳をすませているようなものではなく、いつもの屈託なげな笑顔にもどつていて（義彦の魅力の一つはその子供のような笑顔にあるというのが、恵子と聖子の一致した見解だった）、聖子は何故かホッとした。「聞いたことがあるだろう？」「あるわ」伸子もそれで工場に駆り出されていたと言った。「工場へは行きはれへんかったの」「工場へ行くのは中学三年からで、ほくら一年生は焼跡のかたづけなんかやらされていたんだ。……焼跡のかたづけというけど、まあ、死体のかたづけだな。……臭かったよ。それがちやうど、こんな匂いで……」「やめて！」と恵子が悲鳴をあげた。聖子は黙っていたが、それは突然こみ上げてきた吐気をこらえていたのだった。「いやな義彦さん、ご飯のときにそんな話して」恵子は義彦をにらんだが、義彦はそっぽを向いていて、その表情はまた遠い物音に耳をすませている表情になっていた。

「戦争は……」

と言いかけると、ジョンがひきとった。

「奇妙な戦争だよ。……サイゴンの街を歩いていても、戦争なんかどこにも目につかない」

「田舎は？」

「……田舎だって同じだな。ある一つの部落が攻撃されている。その横で農民は仕事をしている」

「ジョンはベトコンを見たの？」

「そりゃ見たよ……」

ジョンは白い歯を出して笑った。それはクレイトンにいたときと同じように少年のように清潔な笑いだった。聖子は左手でそつと彼の唇にふれてみたい欲望にかられて、その欲望をおさえるように軽く身をよじらせた。ジョンは笑い終り、それからゆっくりつづけた。

「何度もね。……戦争だもの」

「ということは、ジョン、あなたも……」

（殺したのね）ということばが突然口をついて出かかって、聖子はあわてて口をつぐんだ。どのようなことばを最初彼女は言い出したかったのだろう、それはたぶん（前線に出て戦っていたのね）というようなことばだったかも知れない、（殺したのね）がそれをあとかたもなく消し去ってしまった、聖子はぼんやりとジョンの頬のソパカスを眺めた。しかし、いったい、どのようにして、ジョンは人を殺すのだろう。ジョンは聖子の視線に気づくと、それまで窓の外に向けていた顔を彼女に向けて聖子をみつめなおしてから、やわらかく微笑した。

「想像つかない……」

「何が？」

「あなたがここにゐるなんて……」

ジョンはますます微笑をやわらかくした。聖子は拍子抜けのした感じがした。いったい、彼女は、彼に何を期待していたのだろう。それは、やはり、戦場の匂いといったようなものではないか。タクシーに乗り込んだとたんに、飢えたけだもののように、狂おしく聖子を抱きしめるのだが、それはもちろん聖子でなくてもよく、女と名のつくものなら誰でもよくて、そして、それゆえに抱擁は聖子がかつてこれまで味わったこともないほどの激しいものであるのにちがひなかった。あるいは、ジョンはこんなふうではなかったらうか。聖子の顔を見たとたんに戦争の怖ろしさを言い、「テリブル！」と頭をかかえて聖子の膝の上に泣き伏すのでは——彼はそのときふるえているだろう。全身が彼の意志に反して小ささみにふるえおののく。聖子は黙ってその体を抱いてやるのだ。彼の体にまとわりついたその「テリブル！」な戦場の匂いを彼女の抱擁によってひとつひとつ取り去ってやる。それでもまだ、彼女はジョンのふるえを体を感じる事ができるだろう。強く彼の胸に押しつけた乳房に、なまなましく感じることができただろう。「テリブル！ テリブル！」と彼はくり返す。聖子は彼の背中をさすりながら言う。「こわがらないで。いいこと、ここはベトナムとちがうの。日本なのよ」聖子はそうしたことを期待していたのだろうか。期待外れだった。ジョンのしぐさには実際、戦場の匂いは何もなくて、彼はただ清潔に笑っていた。

聖子は窓の外に眼を向けた。ほんとうなら、彼女は街景のひとつひとつを彼に説明してやるべきなのだろうが、東京のこのあたりは聖子にとっても見知らぬところだった。聖子は正直にそのことをジョンに言い、ジョンは笑った。

「……つまり、クレイトンの人がニューヨークを案内しているみたいなのだね」

「そうじゃないわ。大阪はクレイトンみたいな小さな……」
「田舎町ではないのだろ。判ってるよ、大阪は日本のシカゴだ。……うちの部隊の隊長に、戦後すぐ大阪へ行ったことがある人がいる」

「ほんと?!……それで、大阪で何見たって、その人？」
ジョンは聖子を見て、ちよつと奇妙な顔をした。

「……Nothingness、つまり、何もないことを見たって言ったよ」

「何もないことって?……」

「……ぼくはよく知らないけど、大阪というところは、空襲にあつたところなのだろう。空襲であとかたもなくなくなった。見たすかぎり焼野原で、なんにも見えなくて、市の中心のビルから海が見えたって……。Seko, did you see it? Did you see that nothingness, too?」(セー、きみはそれを見たのかい、その何もないことを?)

聖子は曖昧にうなずいた。たしかに見たことがあるような気がする。その何もないという焼野原のさまを彼女はこれまでの人生のどこかで、たしかに、視界のなかにとらえたような気がする。しかし、それはたぶん実際の光景ではなくて、

雑誌の写真で見たものを現実の光景のように記憶の底にとどめてきただけのことなのかも知れない。八月十五日特集。終戦特集。新聞や雑誌はなぜ同じことを毎年くり返すのだろう。原爆のキノコ型の雲の写真。焼野原の写真。聖子の記憶のなかにあるその光景は、ひよっとすると、大阪ではなくて「ヒロシマ」のそれであつたかも知れない。同じことだつた。どちらも焼野原で、電柱の残骸のようなものが間抜けに立っていて、義彦はそれを見たのだらう。そこにあつた死体、あの銕罐の臭気を発するという死体はどこに、どんなかつこうで、ころがつていたのか。いや、義彦がそれを見たのなら、義彦よりさらに年上の藤崎は、もっと数多くの死体を見たことがあるのにちがいない。聖子は上京する前日、三日の夕方に会つたときの藤崎の表情を突然鮮明に思い浮かべていた。あの日はよくなかつた。どうしてなのだらう。彼がひどく疲れていたせいだったのか。無理をしてつくつた時間だつた。正月の三日日はほんとうに外に出る口実がなくて、さつちやんのところにちよつと行つてくることにして出たのだが、外から電話をかけて頼むつもりだつた潮田さつきが、いざ電話をかけてみると不在だつた。それで、いやおうなしに六時半の夕食までに帰らなくてはならない羽目になつた上に、藤崎は阿倍野橋の喫茶店に三十分も遅れて現われたのだつた。そして、そんなふうには遅刻して現われながら、「すまなかつた、おくれて」とただ一言、弁解したきり、自分から進んで口を開こうとしない。「疲れていはるのね？」聖子はそれをまるで救いの呪文のようになり返し、藤崎は藤崎で、

「それほどでもないけど……」とくり返して、そのうち一時間はずんで、彼と別れたとき、正直言つて聖子はホツとした。もつとも、もう帰りの車のなかで彼にむしように会いたくなり、ああも言えばよかつた、こうも言えばよかつた、と思ひ悩んだのだが。どうして、彼はキスをしなかつたのだろう。喫茶店のことだから人眼はあつた。しかし、その喫茶店の二階の同伴席に行けば、そこでは何をしても誰も何も言わなかつた。まえから聖子はそこに眼をつけていて、それで、前日に電話で打ち合わせたとき、「どこで待ち合はす？」と言われてとつさにその「ウィーン」という喫茶店の名をあげた。

ベトナムにも焼野原はあるの、と聖子は訊ねた。

あるかも知れないが、自分は知らない、とジンは答えた。ベトナムには大阪はないよ。小さな農村があるだけだ。だから、それが焼けたところでたいした被害はないだらう、とジンはつけ加える。

だけど、戦争はいや。私は平和主義者よ、と聖子は言つた。知つているでしよう、日本には平和憲法というものがあつて、戦争をしてはいけないことになつてゐる。日本人はみんな平和が好きなんです。過去の戦争でひどい目にあつて、それでも二度と戦争をしないと誓ひあつた。そのこと、知つてゐる？ クレイトンでも言つたことがあつたわね。

知つてゐる、と彼はうなずいた。きみはいつだつて問題が戦争のことになるとムキになつた。誤解しないように言つておろくが、ぼくだって、平和が好きなんだ。戦争なんかないほ

うがよいと思っている。ぼくは軍隊も軍人もほんとうは大嫌いなんだ。性に合わないな。うんざりする。

ジョンは急に顔をそむけると、手を口にあてて欠伸をした。それからまた聖子をふり返って、

「戦争をしてよろこぶのは、そうだな、將軍たちだけだな」と、つくづくうんざりした口調で言った。

上野の博物館でジョンが興味をもったのは墳輪だった。メキシコの土偶などよりずっといいと彼は言った。

口を開いて立っている女の墳輪があった。女は踊って歌っているのだという。ジョンはそれを聖子に似ていると言って笑った。

「私はこんな大きな口開かないわ。侮辱よ」

聖子はふくれっ面をしてみせた。ジョンは彼女がかつて車のなかで眠ったとき、そんな顔をしたことがあると言った。いや、それより（聖子がさらにふくれっ面をすると、ジョンはいくぶんあわてたふうにつけ加える）きみのその古典的な服装が日本の古代を思わせるのだ。……

「うまいこと言ってる……」

聖子は笑ったが、まんざらでもない気持だった。彼女はあの奈良ホテルでの誕生日のパーティのときにも着て行った白地に黒の模様をちりばめた友禪染めのカクテル・ドレスを着ていて、陳列のケースのガラスにうつるその姿はいかにも優美だった。袖先がふつくらとふくらんで、いくぶん様式化された舞台衣裳のようで、聖子はあのパーティ以来この服が気

に入っていて、館内に入ってからオーバーを脱いだのはひとつには室温がかなり高かったせいもあるが、まず、そのカクテル・ドレスを着た自分の姿を陳列のケースのガラスにうつしたかったのだ。そして、墳輪と二重写しのようにガラスにうつる自分の姿はたしかに優美で、聖子は満足の微笑をそっともらした。

ジョンは明るい空色のシングルの背広を着ていた。先刻までオーバー代りに羽織っていたレインコートを手に持って、その明るい空色の背広のままで長身の彼が立つと、陳列室にそこだけ春、いや、初夏がやって来た。そうした明るい空色はおよそ日本人が身に着けようとしないうで、聖子はジョンがアメリカ人であるという事実を今さらのように思った。どうして、アメリカ人はこんなふうに底抜けに明るいものが好きなのだろう。すくなくとも、それを冬のさなかに着る神経を日本人はもち合わせていないにちがいない。いつのまにか聖子は陳列のケースのガラスを鏡にしてジョンと自分をひき比べていた。そうやってみると、聖子の友禪染めのカクテル・ドレスはやはり冬のもので、底冷えのする京都の冷湿な空気をそのままに思い出させる。聖子のドレスがそうだとすれば、ジョンの空色の背広はどうなのだろう。さしずめ、カリフォルニアのさらりとした常夏の感じにちがいない。ベトナムの空気はその背広には暑すぎる。ベトナムの暑さはそれには重苦しすぎる。

「ベトナムは暑いでしょう」
「暑いね。……それに湿気があるんだ」

これからどんな暑くなるのだと言った。

「戦争はまだつづくの？」

「I don't know. Who should know?」(判らないな。だれが判るものか)

ジョンは笑った。白い歯を出して清潔に笑う。まるでその空色の背広全体が笑っているような感じだ。

「デトロイトで美術館に行ったね」

「行ったわ、三度」

一度目はデイトをはじめてからかっきり二週間目。二度目はよくおぼえていないが、三度目はちょうど今ごろだった。

デトロイトの美術館で有名なのは、メキシコの画家ディエゴ・リベラが描いたという壁画だった。それはニューヨークのロックフェラー・センターに頼まれてその革命画家が描いたものだったが、いざでき上ってみると、そこに描き出されている人物の群像のなかにレーニンが『資本論』の本を手にとって入っていた。それが問題になってしまったもんだのあげくロックフェラー・センター側は引取りを拒否したのだが、

最後に壁画を拾い上げたのがデトロイトの美術館だった。といつても、聖子はべつにジョンが長々と説明してくれた曰く因縁を精細におぼえているわけではない。精細におぼえているのは、巨大な壁画のままで(そう、それは問題のレーニンの像のまんまではなかったらうか)、そんなふうには早口で喋りながら彼が彼女の腰にさりげなくまわした手の感触だった。あるいは、あれは何という名前のものだったか、大理石のギリシア彫刻の女の頭像のままで、その女の顔が聖子に似

ているといつて、彼がやにわに接吻しかかって来たときの、彼の表情。その唇の感触。

三度目に美術館へ行ったときには、帰りに市の中心の中華料理店「ドラゴン・シティ」で中華料理を食べた。聖子はその中華料理店へ行くのはあまり好きではなかった。「ドラゴン・シティ」の中華料理はあまり脂あぶらっこすぎで聖子の舌に合わない感じなのに加えて、そこでは、アメリカ人がみんな聖子を中国人だという眼で見るとの。それだけでも感じがよくない上に、中国人の店員たちには聖子が日本人であることが判っているのだらう、アメリカ人に対するとときとくらべて、どこか態度がぞんざいなところがあるような気がしてならない、まるで同輩を見る眼つきで彼女を見る。小畑さんに連れて行ってもらったニューヨークの中華料理店ではそんなことはなかった。日本人だというと、かえって人気があった。デトロイトはニューヨークに比べてやはり田舎で、それだけ意識がおくれていたのかも知れない。

「ドラゴン・シティ」では実際、聖子は落ちつかなかった。

ほんとうのところは、その店のサービスが特にひどかったというわけでもないが居心地のわるさを感じて、アメリカ人式に「チップス」を食べると、ジョンをうながしていつも早に引きあげてしまった。それから近くのキャフェテリアに入つてようやく落ちつくことができたのだが、「私はこっちのほうがいいの」と弁解がましくつづぶやくと、ジョンはときどき「きみもアメリカ人になったんだよ」と見当外れのことを言った。聖子はその彼のことばにいらいらし、同時に心の

どこかで気持ちよいものを感じていた。

そのキャプテリアでは、二人はよくフランス語の会話の練習をした。二人とも外国語としてフランス語のコースをとっていたためだが、あるとき「デトロイトはアメリカの大きな都会で、自動車で知られたところです」というような会話を二人で試みているうちに、隣りにほんとうのフランス人が現われた。チャキチャキのバリッ児である彼はフランスの自動車会社の技師で、かつて朝鮮戦争のとき、国連軍の兵士として日本に来たことがあると言った。聖子が日本人だと知ると、やにわに「コンニチハ」と日本語で話しかけてきた。それから三人で、英語とフランス語のチャンボンで喋ったのだが、そのクロードというフランス人技師の英語は二人のフランス語と似たりよつたりのもので、おたがいがおたがいを判ったというふうにはとうてい行かなかったが、それでも楽しいひとときだった。別れぎわに、クロードは二人の肩を叩いて、「とにかくおどろいたよ、デトロイトのキャプテリアでアメリカ人と日本人とフランス語で喋るなんて」それを彼はかなり早口のフランス語で言ったのだが、奇蹟的に聖子には判って、彼女はとっさに「日本語も話したんですよ」とフランス語でまぜ返した。

「クロードのこと、おぼえてる？」

埴輪の説明にしきりに見入っているジョンに聖子は言った。

「クロード？」

いぶかしげな表情の彼にむかって聖子は説明した。ジョン

は彼女の予期したよりも反応はおそかったが、「ああ、あのフランス人ね」と笑い声をあげた。

「愉快な人だった」

「ほんとね」

「だけど、そのときは思わなかったな」

「何を？」

「あの人、朝鮮戦争のあと、ベトナムで戦ったと言っただろ、まさかそのあとを引き継ぐようになるとは……」

ジョンは苦笑した。

「そんなこと言っていたの？ 私はなんにもおぼえてないけど……」

「ぼくも忘れていたんだ。サイゴンでフランス人と会ってフランス語で喋らなければならなくなったときに、ふっと思ひ出したんだ」

「あの人、どうしているかしら？」

「どうしているかな」

「あの人、どこに泊まっているの、と訊いたら、イムカ・ホテルにいと答えたの、おぼえてる？」

「おぼえていないな。……何だったのだい、それは？」

「YMC Aのことよ。彼、フランス人だから、それ、イムカなんてよんだのよ。おぼえてる？」

ジョンは自分の記憶をたしかめないままにさきに笑い出したというかたちで大声で笑い、まわりの人々がいつせいに彼を見た。

食事のとき、はじめは先刻タクシーで廻って来たばかりのオリンピック競技場のすばらしさが話題になったが、「ほくは日本がこんなに近代的な国だとは思わなかった。アメリカより近代的なくらいだ」と彼は言い、設計者の「プロフェッサー・タンゲ」の才能をほめ、聖子はそんなこと私には関係ないことだと思ひながら、やはりうれしかった、そのあと、たぶんその「プロフェッサー・タンゲ」が話の緒口になったのだろう、おたがいの学問の話をした。聖子はD・H・ロレンスの修士論文の計画を話し、ジョンはジョンで、せつかく今ベトナムにいるのだから、自分の専門の「国際関係論」の見地から後進国の近代化の問題を少し考えてみたいと言った。どのようなイデオロギーにもとらわれず、公正無私の眼で、アジア・アフリカの後進国の社会を見る。

「そんな公正無私な神様のような視点って、ほんとうにとれるのかしら」

聖子はジョンの小鉢に肉を入れてやりながら、ふと、つぶやいた。

「計算機だよ、問題は……インデックスをできるかぎり集めてね、もちろん、その集め方には科学的な配慮が必要なのは言うまでもないが、そのインデックスを計算機に『インプット』する。あとは計算機が答を出してくれる。その計算機が現代の神様の公正無私な眼だというわけだ」

ジョンはそれからベトナム戦争の戦略自体が計算機の計算の結果なのだと、いくぶん誇り顔につづける。そうしながら、彼はナプキンをとり上げてしきりに汗をふいた。

「暑いね」

聖子は姉のように微笑した。ジョンも弟のように甘えた微笑をもらした。

「少しね」

暖房がよくきいている上に、あちこちのテーブルから立ち昇る熱気が室いっぱいにもって、聖子もカクテル・ドレスの上に羽織っていたカーディガンを脱いでいた。このスキヤキ専門の店には、義彦に連れられて二、三度来たことがあるのだが、肉は聖子の好きな神戸肉だったので、恵子などと東京で外出していて夕食をとるときには、わざわざ浅草まで来てこの店のスキヤキにしていた。

「おいしい？」

聖子は念を押すように何度か言った。

「おいしい」

そのたびに几帳面にジョンは答える。

ジョンはクレイトンで聖子の料理のスキヤキを食べたことがあった。寄宿先のリフトン家のちよっとした集まりに聖子はスキヤキの手料理を提供したのだが、それも、もとはと言えはジョンにスキヤキを食べさせたい一心から出たことだった。日本料理店や日本食品を売る店のあるニューヨークやシカゴのような大都会ならいざ知らず、クレイトンのようなアメリカの片田舎でスキヤキをつくらうとすれば、たとえば、そのとき、聖子が日本から持ってきていた「スキヤキの素」とかいいうあやしげな罐詰に頼らなければならぬ。小さな罐詰で、開くと、なかに豆腐の小片、筍、の切れはし、ほん

のひと口程度の糸ゴンニャクなどが、貴重品よろしくちまちまと入っているのが見える。聖子は開いてみて、まるで日本の「貧困」にふれたようないやな気持ちになったが、クレイトンあたりでは、こうした奇妙にわびしい罐詰の参加なしにはスキヤキをつくることは困難だった。肉はもちろん容易に手に入ったが、問題はそれをスキヤキ用に薄く切ること、聖子はそのためにその日の午後の時間をかなり使った。野菜は葱はなくて、玉葱と冷凍食品のブロッコリー、アスパラガス。醬油はクレイトンのスーパー・マーケットにカリフォルニア産のものを売っていたので、それを使うことにした。カリフォルニア産といえば、米もそうだった。「リバティ」という商標のもので、米を入れた小さな紙箱の表には自由の女神が火をかざして立っている。二箱使った。あれで何合になるのだろうか。

ジョンも、そのときのスキヤキのことをよくおぼえていると言った。そうなつかしそうにつぶやいてから、糸ゴンニャクを箸でゆっくりつまみ上げる。

「この糸のようなものも、ぼくはまだおぼえているよ。ぼくがこれは何かと訊ねたら、きみはまったくうまいこと答えた」「何と答えたの?」

ジョンは笑い出していた。

「《Something Japanese》と言ったよ」

聖子も笑い、

「だって、今だって、それ、ほんとうは何からできているのか知らないんですもの」

と軽くしなをつくりながら言った。

ジョンは、ベトナムでも同じことを言われたことがあるとつづけた。ベトナム人は、魚といわず、御飯といわず、「ニョクナム」と呼ぶソースをどぶどぶにぶっかけて食べるのだから、その説明に、あるベトナム人の知人が「Something Vietnamese」と言ったのである。

「セーコがベトナム人に教えたんじゃないかな」
「そうかも知れない」

二人はまた笑った。聖子は笑いながら、今日、ジョンと会ってからこれで何度目に笑うのだろうと思った。ほんとうにホテルのロビーで会ってから二人はずっと笑ってばかりいるような気がしてならないのだが、それでいて、聖子は、二人のあいだに何かくいちがいを感じて仕方がない。子供のころの擬似恋愛の恋人どうしが大人になってから再会するところなふうな異和感をもつのだろうか、それとも、六年前クレイトンにいたとき、聖子にはまだはつきりとジョンがアメリカ人であり彼女が日本人であるという事実が実感として感じとられなかったのかも知れない。いや、それがそうだとすれば、クレイトンにいたとき、聖子はまだ十分に日本人ではなかったのだろう。六年前なら、米の飯も味噌汁もお茶も、そんなもの一切なしで平気で生活して行けたのだが、今では、米の飯と味噌汁はまだなくてもいいが、外国へ行くならお茶だけは持って行きたい。ことに、母がいつも入れてくれる番茶がいい。インスタント番茶。粉末になっていて、すぐ番茶ができる。このあいだ、近くのスーパー・マーケットに買物

に行つたとき、つい、ふらふらと買つてしまつた。

何か透明な膜のようなものがある、と聖子は思つた。ガラスがジョンと彼女のあいだにあるとまでは言わない。ガラスはジョンの息づかいを聖子に伝えはしないだろうが、彼女は今たしかに彼の息づかいを感じていて、それでいて、その息づかいは彼女の肌にしつとりと乗つては来ないのだ。昔ながら、息づかいの一つ一つが聖子のそれと一致していたような気がする。英語を話していることがそのときにはそれほど自然だつたのだろうか、会話力からいえば現在のほうがはるかにまさつていると思うのに、たとえてみれば、現在の機械としての英語のみごときだつた。頭のなかに英語という一つの機械を聖子は持つていて、その機械はまさによどみなく動く。英語の機械説は実を言うと義彦の説なのだが、彼によると、聖子の機械は立派なオートメーション工場にある精密機械だという。あるいは——と彼は聖子の顔を見なおしてから言いなおした——きみはもつと可愛いから、そのオートメーション工場からつくり出されてきたトランジスター・ラジオみたいなものだ。

昔は機械でなかつた、とジョンの無器用な箸さばきを見ながら聖子は思う。下手は下手なりに英語を話すことがそれだけ自然だつたのだらう。アメリカ人の子供の舌足らずの英語のようなものだったかも知れない。舌足らずで、洗練されていなければ間違いも多かったにちがいないが、自然なことは自然だつた。それだけ今は年をとつて、それだけ日本人になつたということなのかも知れない。

「私、英語、下手になつたでしょう？」

ジョンは箸の動きをとめると、ふしぎそうに聖子をみつめた。

「どうして、きみはそんなことを言うのかね。きみの英語は完璧だ」

「……………」

「セーコ、きみはどうしてアメリカに帰つて来ないの」

「……………」

「きみぐらい英語が話せて、能力があつて……」

「私、日本にいて……」

聖子は自分でもなぜこんなことを言い始めたのだろうかといふかしみながら、それでもかまわずつづけた。

「もうすぐ結婚するの」

その瞬間に聖子が期待したのは、ジョンの悲しげな表情だったにちがいない。それを聖子がさつたのは、彼が表情をかえないで、いや、むしろ、ほんとうによるこぼしい表情で、「Really? That'll be wonderful. Congratulation」(ほんとかい？ そいつは素敵だ。おめでとう！)と箸をふり上げるようにして大声で叫んだときだった。聖子は裏切られたような気がした。ついで、わけのわからない虚脱感が彼女の全身をとらえる。正直に言つて彼女は悲しかったのだらう、聖子は実際今にも泣き出しそうな表情でジョンをみつめ、自分がなぜ「もうすぐ結婚するの」というような自分でも思つてもいかなかったことを口にしてしまつたのかと、激しい後悔の気持にとらえられていた。

ジョンはさらに思いがけないことを言った。

「セーコ、ぼくも、うまく行くと、婚約するかも知れない」
相手はラドクリフ女子大の女子学生だ、とそのことをよほど誇りに思っているのだろう、相好をくずして言ってから、ジョンは身分証明書を入れた定期入れのなかから写真を出した。手帳に夫人や恋人や子供の写真を出してみせるのがアメリカ人の習慣だが、聖子はそのことに気づいて、ああジョンはやはりアメリカ人だなと思ったのも、それだけそうした習慣から長いあいだ離れて生きてきたということかも知れない。昔の彼女なら、その動作をまったく自然なこととして受け入れたことだろう。聖子はそんなふうな感慨にとらえられながら、写真を手にとった。

なるほど、いかにも名門女子大の秀才女子学生らしい、瘦せて顎のとがった細面の小柄な女性が、いくぶんなめに構えながらうつっている。どこことなくラウシュ大使秘書のボブ・リチャーズの夫人に感じが似ていて、そういうえばボブ夫妻も、それぞれハーバードとラドクリフの出だった。

「She is charming」(魅力的なひとね)

聖子はいったん「She is pretty」(可愛らしいひとね)と言いかけてからそう言いなおすと、ジョンはにこにこした。

「Yes, she is really charming……You'll like her」(うん、ほんとにチャーミングなんだ。きみも好きになるよ)

聖子はうなずいた。

「Yes, I'm sure. I'll like her」(ええ、私もそう思う。きっと好きになるわ)

彼女の専攻は心理学。おそらく将来は、夫である自分の心理を研究材料にして論文を書き上げるつもりでいるのだろう。ジョンはうれしそうに言う。今は学部にいるが、もちろん大学院へ行く。二人のつきあいはこれで一年になる。聖子はそうジョンが言ったとき、ジョンはもうこのバーバラという女性と体の関係をもっているにちがいないと直感して、ジョンの毛むくじやらの腕がバーバラの瘦せて小さな体を抱き上げるときのさまを心に描いた。

「きみの許婚者は?……」

ジョンは運ばれて来た日本茶をまずそうに飲みながら、聖子をいくぶん上気した表情で見た。

「外交官……」

聖子はもうすっかり落ちつきを取り戻していた。バーバラが思ったほど魅力のある女性ではなかったことが彼女を安心させたのかも知れない、聖子はジョンが自分も婚約するつもりであると言ったときに、何故かひどくみじめな気持がしたのだが、それはバーバラの写真を見たことであとかたもなく消え去っていた。

「外交官って、日本の?……」

ジョンは奇妙な質問をした。自分でもそれが奇妙な質問だと思ったのかも知れない、ちょっと照れたように笑った。

「もちろんよ、私、日本人だもの」

ジョンの蒼い瞳のなかの聖子がきおいたって答える。聖子はそれを見ていて、どうして許婚者に藤崎をあげなかったのだろうと自分でいぶかしんだ。彼女がそうすれば、ジョンは